≪第４分科会記録≫

講　師：境　公雄　氏（福岡県三潴郡大木町役場　環境課課長）
ファシリテーター：田邉　裕正氏（NPO 法人九州環境カウンセラー協会　副理事長）
記　録：中島　昭一　氏
参加者：15 名

【テーマ】持続可能な循環のまちをめざして

【講演内容】

ごみを廃棄物ではなく「資源」として捉え、さらにそれを「活かす」ことが重要である。

活かすことにより、ごみが「ゼロ」になり、持続可能な社会の構築にも繋がる。

活かすことにより、人やお金が回り出し、町づくりにも繋がる。

活かすことにより、農地（生産者）と台所（消費者）が繋がり、農村と都市が繋がる。

その為には、活かす「しくみ」を作ることが重要である。

徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」が成功したのも葉っぱを資源として捉え、ビジネスに繋がるしくみを作ったのが勝因であり、高齢化社会対策にも寄与している。

当町は、10 年後にごみをゼロにするという高い目標を掲げ、「ゼロ・ウエイスト宣言」（大木町もったいない宣言）を発表した。

ごみをゼロにするには、焼却ごみ、特に「生ごみ」をどう減らすかがポイントであり、生ごみを資源として捉え、バイオマス資源化による「生ごみ循環事業」に取組んだ。

生ごみのバイオガスシステムから作られる液肥は、町民財産として農地に還元され、農産物は学校給食に使用され、「道の駅おおき」にて販売されている。

生ごみ循環事業により、ごみが半減（重量）し、地域の一体感が生まれ、地域農業への貢献、ごみ処理費の削減に繋がり、地域の活性化に大いに貢献出来た。

【グループディスカッション】

大木町の取組みをベースにしての資源循環について

Ｑ（参加者）：ごみの分別は、どのようにして住民に浸透させて行ったか？

Ａ（境様）：先ずは 500 世帯程の地区でモデル事業としてスタートし、半年程住民の意見を聞いて改善を繰り返した。ゴミ行政は、意識の低いレベルに合わせるのではなく、高いレベルに合わせるのがポイントである。

Ｑ：スタート時には、「ごみの循環」を絵に描いて取組んだか？

Ａ：「循環の町づくりビジョン」を先ず住民に提案し、住民と議論を重ねる中で、しくみを固めて行った。住民の後押しが重要である。

Ｑ：ごみ処理計画は、大木町単独で出来るのか？

Ａ：焼却ごみは、近隣行政協働での取組みとなるが、生ごみ循環事業については単独

で行った。

Ｑ：住民を巻き込んだ取組みの秘訣は何か？

Ａ：大木町は小規模行政なのでやり易い面があった。先ずは、積極派住民との議論から始め、徐々に広げて行った。49 行政区全てを回った結果、反対は無かった。住民とひざ詰めで話し合うというコミュニケーションを如何にして取るかが重要である。

Ｑ：スタート時に全住民を引っ張っていくポイントは何か？

Ａ：しっかりしたしくみが必要であり、行政が中心となって引っ張って行くことがポイントである。

Ｑ：生ごみ循環事業を進める中で、上手く行かなかったことはあるか？

Ａ：当初は、生ごみの分別が上手く行かなかった。最初から上手く行かないとは考えていた。楽観的に考え、上手く行かなければ都度改善すればよい。

Ｑ：10 年後にごみをゼロにするという高い目標を掲げているが？

Ａ：高い目標を設定するのは大事と思うので、敢えて「ごみゼロ」とした。この町を具体的にどのようにするか、何をやりたいかは住民は分からない。

Ｑ：業者との協働のコツは何か？

Ａ：事業の明確なビジョンを示すことが大事である。ごみの常設置場を設置し、業者が直接回収しており、行政の回収費用が不要になった。地域には助成金を出している。

Ｑ：生ごみの肥料化は、異物が混入すると上手く行かないが？

Ａ：分別に住民負担が掛らないようにしている。基本的には、土に還るもの以外は投入禁止としている。卵の殻、貝殻は投入禁止。

・参加者：高校生を対象とした「ごみ分別体験学習」を 15 年程行っている。最初からゴミ分別の大切さを説明してもあまり関心を示さないので、先ず携帯電話の使用料を親が支払っていることから話し始め、お金の大切さ、資源の大切さを実感させ、ごみ分別の大切さを説明している。体験学習でゴミ分別が大変であったことを親に伝えることにより、資源循環の輪が広まって行くものと感じる。

・参加者：小学校で微生物を用いた排水処理の課外授業を実施している。微生物を顕微鏡で見せると聞くだけの授業と異なり、関心が強くなっている。継続的な環境教育が必要であるが、課外授業では限りがあるので小学校の教師を支援（教材の作成など）するようにしている。子供達を変えることは今後の大きな課題である。

・参加者：大木町の成功のポイントは、農業の町であったこと、その為に液肥が活用でき、農産物が道の駅で販売出来るという地産地消が実践出来たこと、また、住民とのひざ詰めでの話し合い、住民の意識改革、行政の旗振り、手近なところからの取組みなどが住民を巻き込んだしくみの構築に繋がったものと感じる。